



わたらいせいじ
渡會清治さん
(株)アールトゥ計画
事務所代表取締役)



もちずみみつお
両角光男さん
(熊本大学工学部長・同大学
院自然科学研究科教授)



きむらみえこ
木村三重子さん
(環境演出家・
フラワーデザイナー)



よこおとしひこ
横尾俊彦市長



えりぐちなおこ
江里口尚子さん
(NPO法人
のんびらぁと理事長)



まさきとしお
真崎俊夫さん
(株)音成印刷
代表取締役社長)

■コーディネーター

**お父さんのまちづくり
お母さんのまちづくりは、
お母さんのまちづくりで住みやすく**

木村 福岡で10歳の子どもたちに花を育ててもらっています。成人した時、生まれ育ったまちが大好きと、誇れる子どもを育てる活動で、お母さんのまちづくりだと思っています。まちを守ったり、育てたり、お年寄りから話を聞いたり知恵を学んだり、子供たちにそれを教えていく、そのようなことを考えるのがお母さんのまちづくりで、そのまちづくりが健康的にやれるようにして枠組みを作るのが専門家や市長さん達かと思っています。

両角 一言でいうと男のまちづくりは骨格を作る作業。でも、施設や道路、土地利用などで暮らしやすい場所にはならず、それに生活者の視点で肉付けして表情を豊かにしていく作業がお母さんのまちづくりです。その両方がないと住みやすいまちにはなりません。

**自分たちでいっとくと楽しんでしまっ
そういう発想が大事**

渡會 では実際、どういうまちが望まれていると思いますか。

笹川 まずは市民が多久をセールスするのに分かりやすく、自慢できるポイントがあるかと思っています。

真崎 多久にも、自慢できる食べ物があります。駅でもどこでも人の集まる所に食は、はずせません。子育て世代のお母さんや高齢者、免許を持たない小中学生などでも気軽に買えるお店が多久駅周りには必要ではないのかと常々思います。

江里口 高齢者の方々の話を聞くのが好きですが、昔話には郷土愛を感じますが、多久駅周辺にも郷土愛につながるものがある、子ども頃から「多久を好き」でいれる教育が必要だと思えます。

両角 多久は魅力がないや、誇りを持ってなくなっているのではという話は、街の顔が消えたからではないでしょうか。かつての多久駅周辺は、嬉しい時に行つて物を買う場所というイメージがあつて、要はその顔があつたということだと思います。今はそれがはつきりしなくなつたので、車や電車で行けば便利なものがある時代。そういう意味で、生活者の視点であそこに行けば楽しい場所がある、楽しい生活ができる、面白い事がある場所ができること、子どもたちも多久を意識するようにするので、そこを埋める作業が求められていると思います。また、人よさを説くのも大事ですが、お母さんのまちづくりの視点で、自分たちがそこに行くこと楽しい、嬉しいというものを作らねば。他所の人のためにまちづくりをするのは後でいいんです。まずは自分たちが楽しめるようにすること。楽しんでいけば他の人たちも自然に寄つて来ます。自分たちに楽しく、お母さん分けのつもりで情報を流し、もてなす。身の丈に合いながら自分たちで楽しんでしまつてそういう発想が大事じゃないかと思えます。

木村 駅を中心に、多久の顔を作ることとをみんな力で合わせれば、きつと誇れるまちになっていくと思います。

市長 買物が不便になっている状況があり、解決も重要なので、情報を集めて対応していきたいと思っています。今は、お父さんのまちづくりで言う仕事の最中ですから、しっかりと基盤、骨格を作つて、そこに花や緑の潤いを育んでいき、ハッピーやハーモニーにつながる色んな知恵をより合わせていきたいと思っています。お父さん、お母さんのまちづくりを合わせながら、子供たちがワクワクするようなまちづくりを目指す努力をします。

**工夫すれば「何も無いを
逆転できる可能性が十分**

渡會 みなさんの話で感じたのは、盆地の地形で周りに緑があるので、もう少しがんばれば、かなり良くなるということ。これは、地元の人にはなかなか気付かないでしょうけど、それがまちづくりの大事なポイントで、工夫すれば「何も無い」を逆転できる可能性が十分あると感じました。この土地が持っている資源を理解し、生かして、何を加えればオンリーワンになりうるかがお話に出てきました。最近、シビックプライドという言葉がありますが、これは、その都市に住むことを誇りに思う、そのために行政を含め、アピールする努力です。この半年間、多久の方々とお付き合いをしていて、多久もそのようなマーケティングをやつて、まちづくりにも投入できれば、若い人たちのモチベーションを高めることができるのではないかと思います。

(要旨をまとめました)